

第277回 令和8年8月26日（水）

「本はやっぱり紙派です」

私は週末に本屋に行くのが一番の楽しみです。金曜日になると仕事帰りに本屋に寄ることを考えてワクワクします。手に取った本が実際に読むと「ハズレ」ということも多々ありますが、読了すると一つの旅を終えたような満足感があります。

私は俗にいう「鈍器本」と呼ばれる凶器になるくらい分厚い本が好きです。旅でも1週間くらいの長期で見知らぬ土地に行くとかかなり刺激を受けることになりますが本も同じです。鈍器本を読了すると達成感は普通の本の2倍です。なかにはいたずらに引き伸ばしにかかっている本もあって、終盤が辛くなることもあります。そのような本を読み終わった時には勝利感を得られます。

最近本は高いので、2000円以上する単行本などを買うと出費がかさみます。それでも町の本屋と作家さんを守るためには必要なお金だと割り切っています。本屋と作家さんがいなくなったら私の人生がつまらなくなってしまいますから。

鈍器本を読むとき、残りのページ数が気になります。「半分まで来た」と感じたり、ものすごく面白い本なら「もうすぐ終わってしまう」と残念だったりします。

鈍器本の代表的な作家、京極夏彦さんの本などは妖怪の蘊蓄だけで20ページ、30ページいくこともあります。気が遠くなることもありますが「負けるものか」と読了します。

一時キンドルなどの電子本にチャレンジしたこともありました。しかし電子本は残りのページが一目でわからないですし、鈍器本の重みを実感できませんでした。読み終わった本が積み重なっていくこともないので読了したときの満足感が少なくてすぐに止めてしまいました。また本屋での出会いがないので作品に愛着がなく、ちょっと読みづらいと思うとすぐに次の作品に目が行ってしまうところも好きになれませんでした。

懐古主義で「古き良き」を頑固に守り続けるつもりもありますが、本というのは表紙を通じて出会って、予想外の気づきや発見をさせてくれるものです。旅や講演などに比べると知識の定着率は若干低いかもしれませんが、自分をアップデートさせてくれる貴重な体験です。

旅は準備や時間がとても大変です。それだけに一生涯残る刺激を得られることもあります。本は1分あればすぐにページを開いて冒険を始めることができます。ネットの記事を見ても記憶に残るものはあまりありません。やっぱり紙の本を開いて、1ページ目から想像の旅を始めるほうが自分にとって有意義なのではないかと思います。